（別紙様式）

令和５年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

藤沢市立駒寄小学校

研究テーマ：「児童が主体的に取り組む　魅力ある授業づくり」

１　実践の目的

本年も、前年に引き続き、滝の沢中学校、滝の沢小学校、石川小学校と「児童・生徒の『学びに向かう力』の醸成」を大テーマとして連携を深めてきた。中学校との交流の機会がなかなか持てなかったという昨年度の反省から、中学校との合同授業研究会を設定し、校内での研究教科を一つに絞ることでより一体感のある研究推進を図った。

校内では、本校の学校教育目標である「自ら考え、判断し、行動できる子の育成」を目指して、「児童が主体的に取り組む魅力ある授業づくり」という同じテーマでの研究 ４年目に入った。近年の本校の全国学力・学習状況調査の結果に国語科の「書くこと」について課題が見られたことから、今年度は教科を「国語科」に絞り、本校児童に身につけさせたい力として挙げられていた「自分の考えを持ち、伝える力」の育成に努めた。

２　実践の内容

（1）研究の概要

各学年の校内研究推進委員が中心となり「授業者を一人にさせない授業研究」を合言葉に授業実践を中心とした研究を推進し特別支援学級と各学年が 1 本ずつ、年間で計 7 本の研究授業を行った。学年で作成した指導案をもとに、研究授業前に全教員で模擬授業、協議会を実施した。

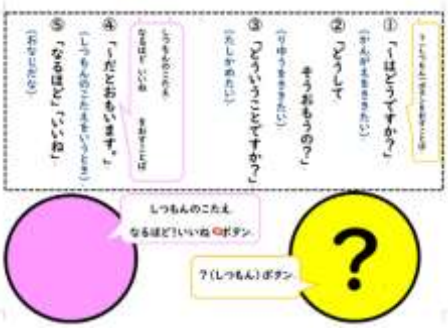
また、小中連携推進のために、今年度は本校を午前授業にして、滝の沢中学校の研究授業、協議会に全教員で参加する計画を早々に立て、６月に実施した。令和 5 年度に高学年教科担任制推進校となり、専科指導と担任間の授業交換を実施し始めたタイミングでもあったので、中学校の教員と授業を通して交流することができたことは意義深かった。また、夏季研修会では、山梨大学の茅野政徳先生を講師として招聘した。本校の研究テーマに沿って「児童の主体的な学び」を生み出す授業とは何か、学習課題の工夫、既習を生かした学びの繋がり、教師側の手立て等について、多くの実践例を交えてご講演くださった。本推進校である小中学校がそれぞれ講師の先生をお招きして研修会を行い、互いに交流できたことも教員の知見を深めることに繋がった。

（2）「魅力的な授業」づくりのために

・特別支援学級では「探偵役（聞く）」「客（話す）」と立場を明確にし、劇化することで、児童にイメージを膨らませて意欲的に取り組ませることができた。

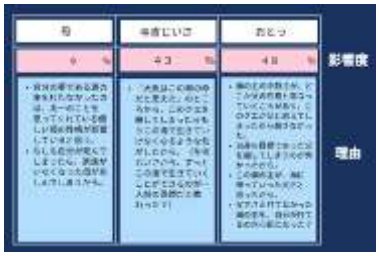
・低学年では、スモールステップで児童が見通しを持って学習に取り組める手立てを工夫した。ペアでの話し合いでは、紙に書かれた「質問ボタン」「なるほど・いいねボタン」を押す動作を加えたことで、話し合いに苦手意識のある児童が自然に活動に参加でき

た。授業目標を焦点化できるワークシートについても事前検討し、よりよい形を探った。



・中学年は、コロナ禍での数年間にグループでの話し合い活動が制限されていた影響をより大きく受けている。そのため２年時に使用したオリジナルキャラクター「おなじか【共感】」「たしかめ」「かんそう【聞いたことに自分の思いをのせる】」「しつもんキー【思いをもってさらに聞く】」を３年時でも既習として活用。さらにグループでの話し合い活動の経験不足を補うために「司会」などの役割毎のマニュアルを示した「話し合い虎の巻」を児童と共に作成し、活用している。事前検討会で、児童に話し合う必然性を持たせる「話し合いのテーマ」について再考したことは、児童の話し合いを深めるために有効であった。

・高学年では、「海の命」を読み、「主人公に影響を与えた人物は誰か」について考え、影響度（割合を円グラフで示した）とその理由についてロイロノートで共有した。視覚的に表すことで、友だちとの考えのズレを意識させ、より主体的に根拠を持って話し合う手立てとなった。



・授業参観中に「校内研究テーマとの関わり」「児童の様子、つぶやき等」「教師の関わり」を見取って参観者が付箋に記録することで視点を明確にした研究協議会を目指した。

３　実践の成果

研究授業の前に授業を検討する時間を持つことで、授業者の思いやねらいを共有し、一体となって研究を進めることができた。授業に至るまで、多くの視点で考え抜くことができたことに加え、今年度は教科をそろえたことによって、学習内容の系統性にも着目し、より深い成果を上げることができた。授業後の研究協議では、事前に立てた協議の柱を意識して進めることで焦点を絞った話し合いをもつことができた。授業公開当日に至るまでの試行錯誤と授業後の協議会によって、研究の成果をより大きなものにすることができたと感じている。校内の教員だけでなく、講師の茅野先生、指導主事の方からいただいたご助言により視点が定まり、研究を深めることもできた。

児童については、今年度の取組を通して、昨年度の取組成果である「自分の思いを伝える」「お互いの考えを認め合う」という基本姿勢の上に「自分の考えを持ち、伝える力」の向上が「話す」「書く」の両面で見られた。

４　今後の展開

今後も授業研究に力を入れ、児童の学びに向かう力の資質・能力のさらなる向上を目指していく。今後もさらに小中の連携を図り、９年間の学びの向上を目指すと共に、家庭、地域というそれぞれの場における児童の育成にも生かせるように、こうした取組を学校運営協議会や保護者の全体会においても共有できるよう努めていきたい。